

関東大震災、アメリカ 1060 万ドル*の支援

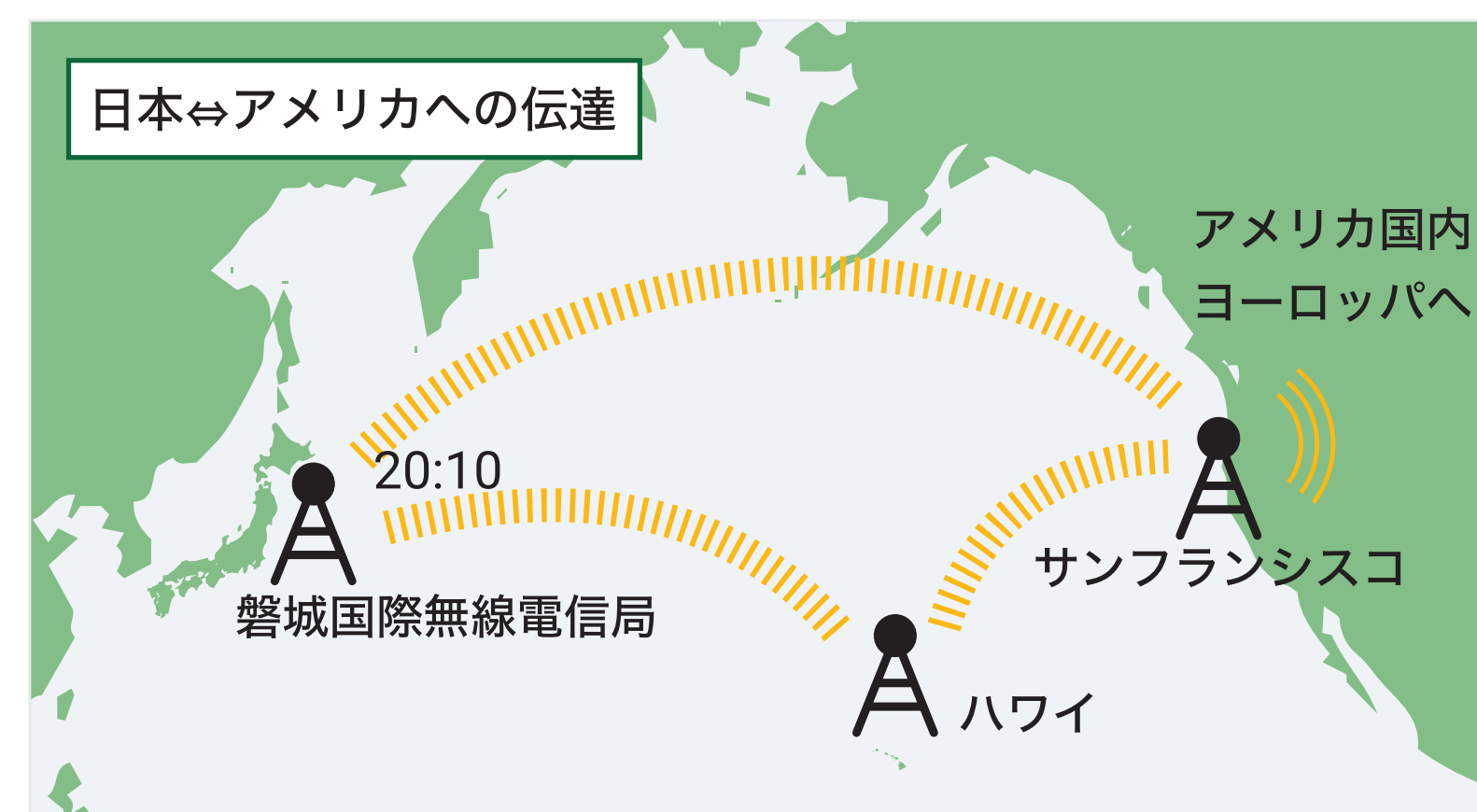
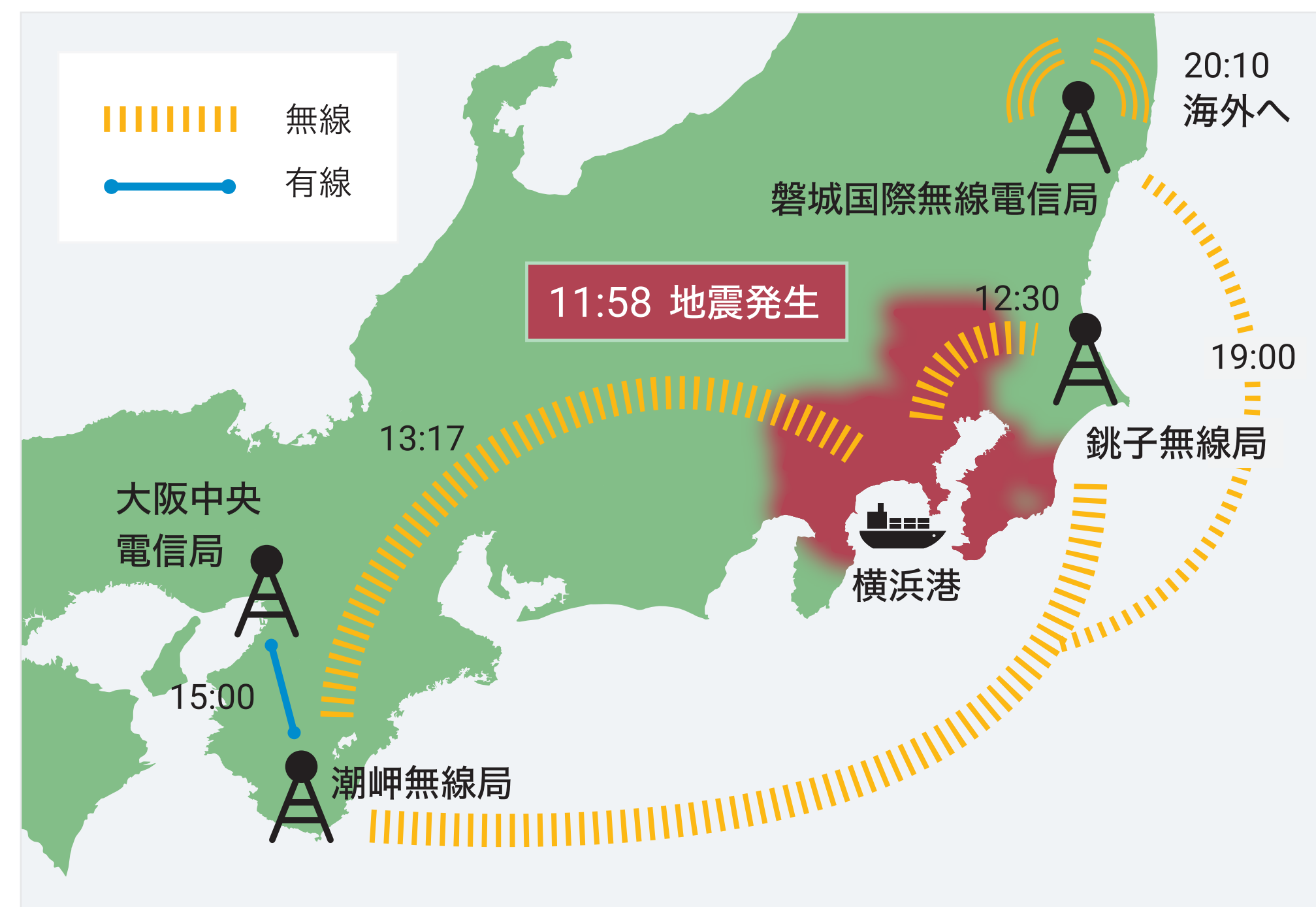
もっとも早く、もっとも大きな支援はどのように実現したのか？

* 現在の物価に換算すると約 200 億円

東北の無線局の活躍

1923年9月1日

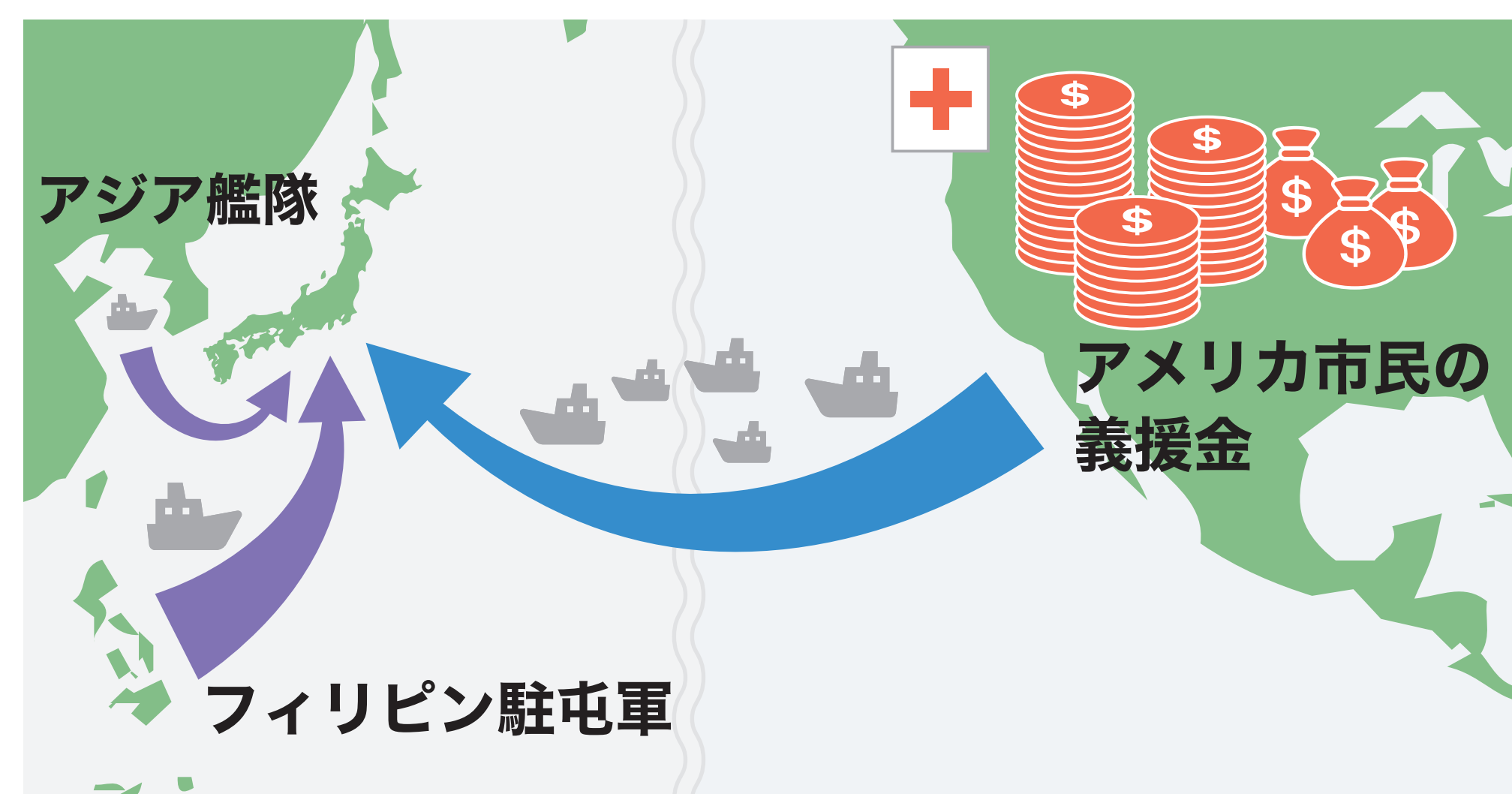
11:58	関東大震災発生 首都圏ですべての通信が停止 磐城国際無線電信局 では地震のあとに東京と横浜に直通する有線通信が切れたことをおかしく思い、国内無線の受信機をつくりはじめる
12:30	銚子無線局が 横浜港の船 から神奈川県知事が出した無線をキャッチ
13:17	潮岬無線局が横浜港の船の無線をキャッチ
15:00	大阪中央電信局に神奈川県知事のメッセージが届く
19:00	磐城国際無線電信局 が国内無線の受信機を完成させ、神奈川県知事のメッセージを知る
20:10	磐城国際無線電信局 が神奈川県知事のメッセージを英語に翻訳してアメリカに送る



クーリッジ大統領のリーダーシップ

1923年 アメリカ

9月1日	サンフランシスコの新聞が号外を出し、横浜の被災をニュースにする クーリッジ大統領が天皇にメッセージを送る 同時に 陸海軍、船舶局、赤十字に指示を出す
------	---



■ 陸海軍への指示

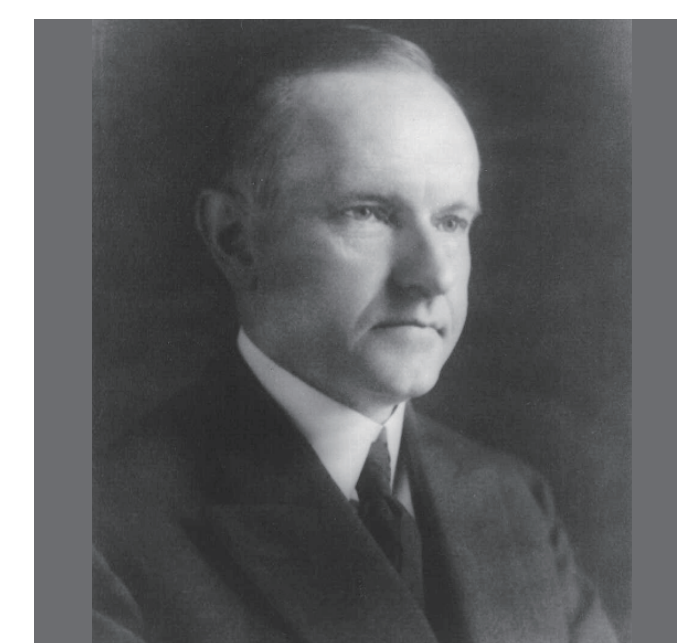
クーリッジ大統領は陸海軍に出動命令を出した。海軍は中国に展開していた**アジア艦隊**に命令し、横浜に向かわせた。艦隊は9月4日に長崎に無線を中継する船を配置した。9月5日には救援用の船が被災地に到着した。

陸軍は**フィリピン駐屯軍**から医療支援部隊を向かわせた。9月5日に最初の輸送船「メリット」がベッド3000床、医薬品150トン、食料750トン、医官18名、看護師60名等の医療部隊とともに出航した。9月10日には3か月分の備蓄だけを基地に残し、もう一隻の船で残りの物資をすべて日本に送った。2隻あわせてベッド6000床、物資1万3千トンの支援だった。

■ 船舶局への指示

クーリッジ大統領は船舶局を通じて船会社に命令を出した。日本に物資を届けるため、太平洋に船を出せる会社はこれから1か月の予約を取り消すこと、日本を出港した船舶はUターンして日本を助けることが伝えられた。

9月20日を過ぎると、他の国の商船も日本に到着したが、アメリカの船はそれまでに19隻も日本に到着していた。



カルビン・クーリッジ
第30代 アメリカ合衆国大統領

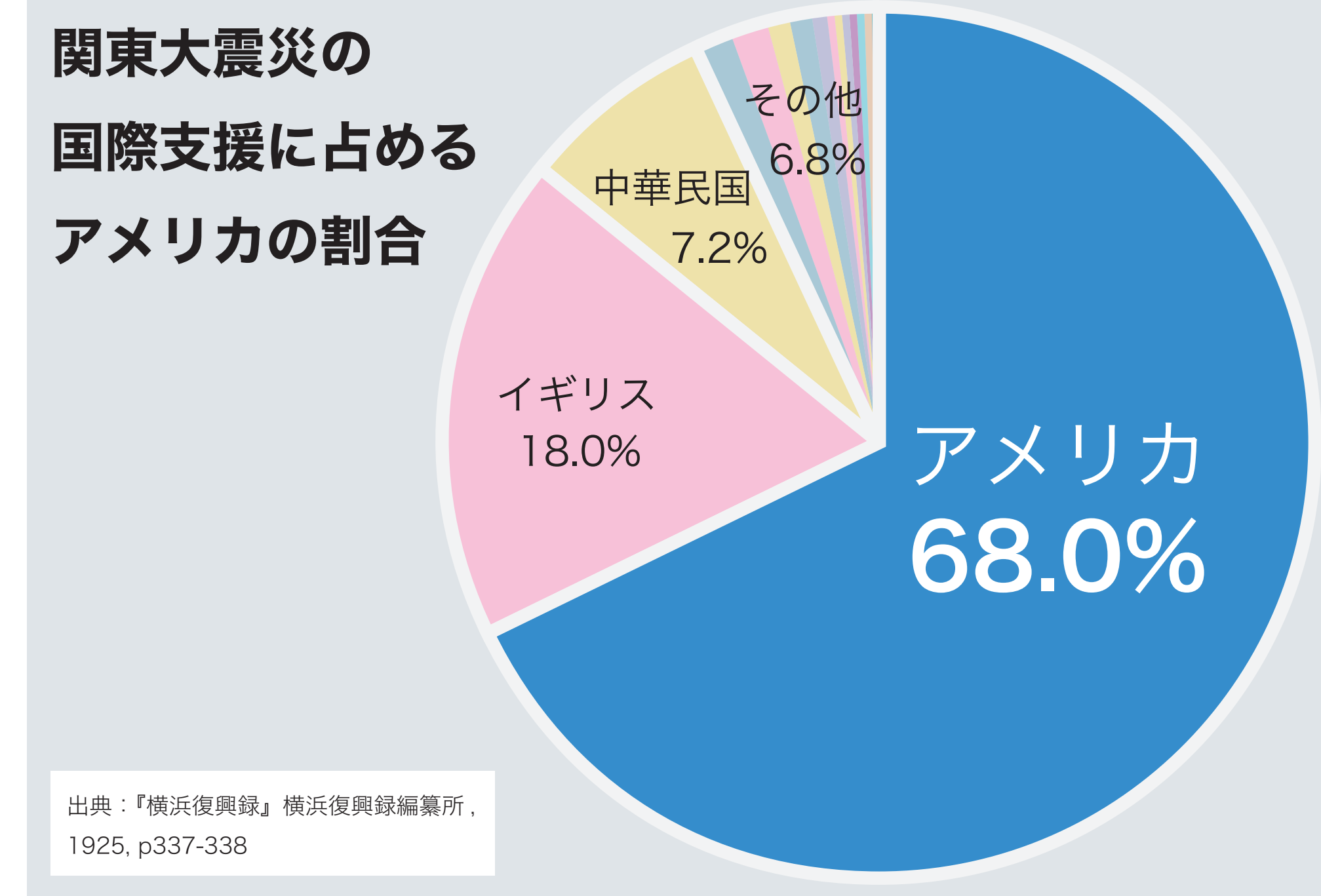
写真出典：Library of Congress,
<https://www.loc.gov/resource/cph.3a53302/>

■ 赤十字社への指示

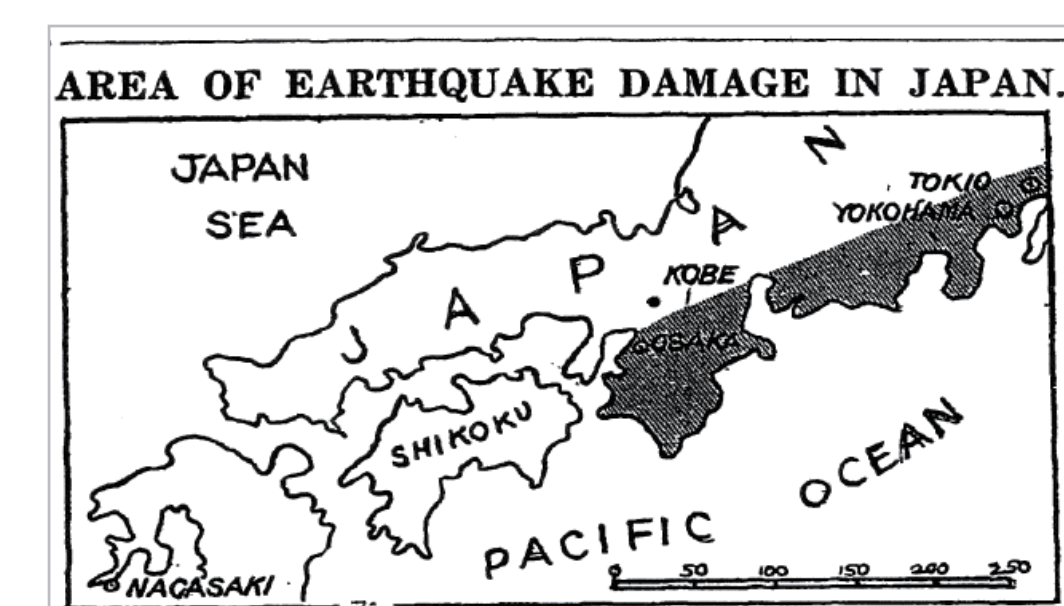
クーリッジ大統領は赤十字社を通じて義援金の呼びかけをおこなった。赤十字の会合に参加するだけでなく、アメリカに浸透しはじめたばかりのラジオを使った呼びかけもおこなった。

また、現地の活動は日本人にまかせること、アメリカは届けた物やお金の使い方、配り方について何も言わないことを決めた。

9月2日	「東京、横浜、名古屋全滅、罹災民数百万」の報道
9月3日 午後	クーリッジ大統領が埴原大使をホワイトハウスに呼ぶ
午後3時	クーリッジ大統領が 義援金を呼びかける大統領布告を発表する
9月4日	「17年前のサンフランシスコ大地震の際、日本赤十字が迅速に10万ドルを送ってくれたことへのお返し」をすると赤十字が発表 キリスト教団体が5千ドルを日本に送る
9月5日	中国にいた日本海軍が救援物資とともに品川沖に到着* 中国にいたアメリカのアジア艦隊七隻が横浜に到着(海外からは初めての救援船)* *日本時間
夜	埴原大使が初めて日本から直接連絡を受け取る
11月末	義援金1060万ドルが集まる

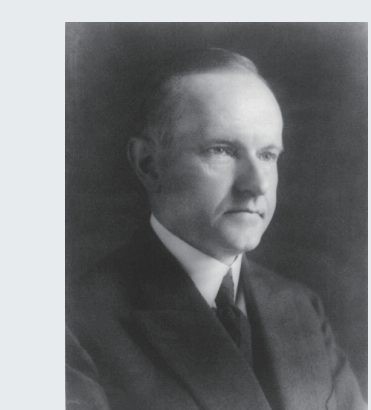


義援金集めのための行進をするアメリカ市民 (シカゴ)
出典：『関東震災画報 第3輯』大阪毎日新聞、1923、p13、<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1682582/1/35>



9月2日のアメリカの新聞
出典：The New York Times, Sep 2, 1923

クーリッジ大統領と埴原駐米日本大使の面会



クーリッジ大統領

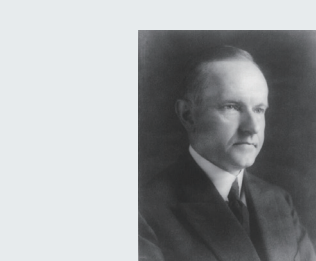
そちらには何の公報も入っていないと聞いたのだが、これは日本でとても大変な事態が発生しているのではないかとにかく急いで大々的な支援をする必要があると思う。

アジア艦隊とフィリピン駐屯軍に急いで救護に向かうよう伝えたが、それではとても足りないだろう。しかし議会を開いて相談しないとこれ以上のことはできない。

そこでアメリカ国民に直接支援を頼もうと思う。日本国民はアメリカ国民に助けられることをどう思うだろうか？



埴原大使



クーリッジ大統領

とても感激するでしょう。できるだけ沢山の援助をください。

ではすぐに国民に知らせよう。

出典：『「排日移民法」と闘った外交官——1920年代日本外交と駐米全権大使・埴原正直』、藤原書店、2011
写真出典：Library of Congress、<https://www.loc.gov/resource/cph.3a53302/>、<https://loc.gov/pictures/resource/ggbain.25161/>

20 世紀初頭、日本とアメリカの災害支援

1905年 東北三県凶作

宮城・福島・岩手を厳しい雪や雨、寒さが襲った。特に岩手県では大きなダメージを受け、多くの土地では平年の半分以下の米しか収穫できなかった。

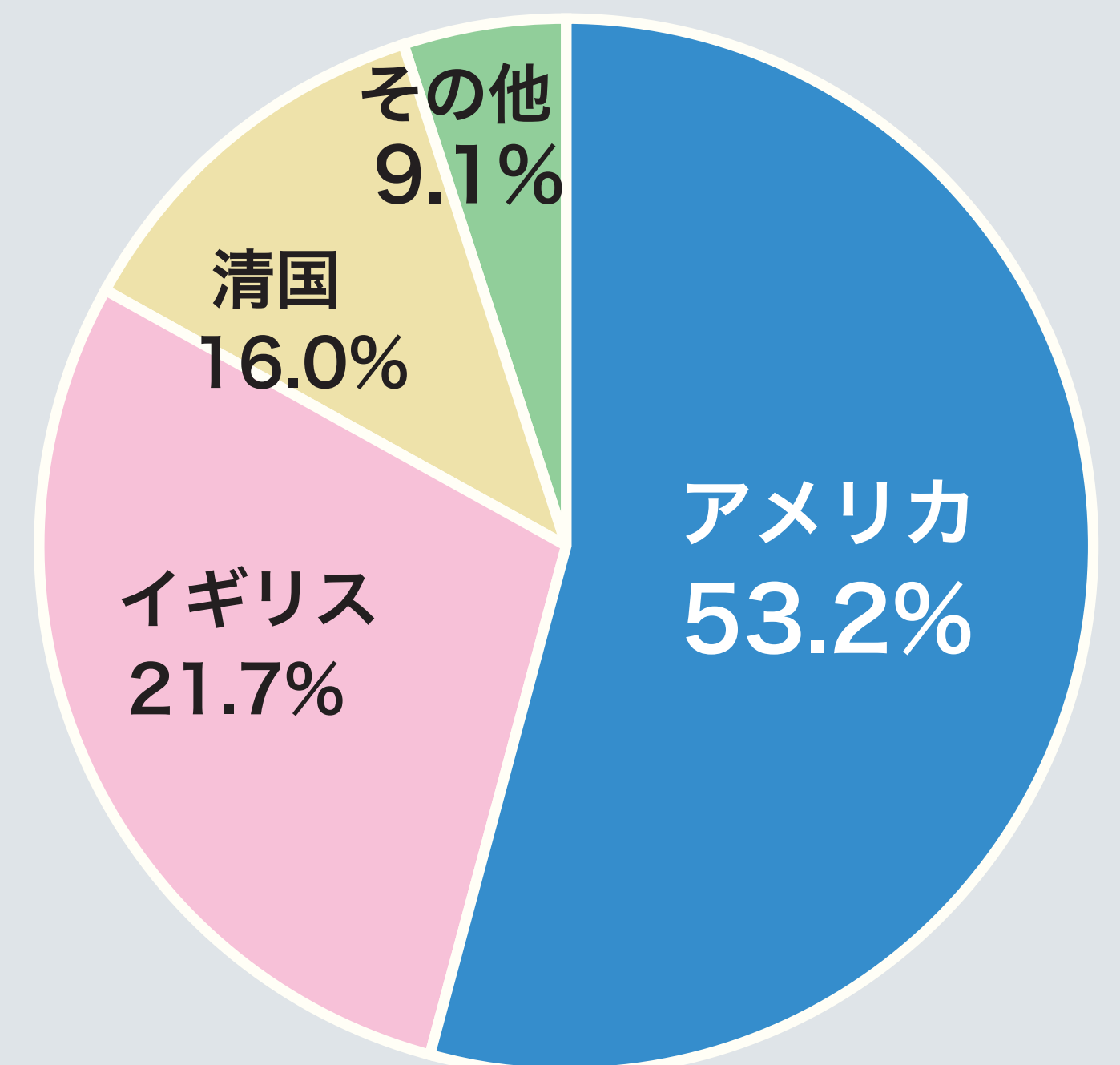
このとき、日本は初めて外国から本格的な支援を受けた。最も日本を支援したアメリカの義援金は、各国の支援の50%以上を占めた。

1906年 サンフランシスコ地震

東北三県凶作の義援金が届き始めたころ、アメリカで地震が発生した。日本はアメリカに対し、天皇陛下からの下賜金20万円を含む24万6000ドルの義援金を送った。これは各国の支援の50%以上を占めた。

クーリッジ大統領は、関東大震災で日本を支援する理由を聞かれた際に、この時日本から受けた支援を理由の1つに挙げていた。

東北三県凶作における各国の支援



総額104万円

日本人は支援をどう受け取ったのか？

アメリカの支援は当時の日本人に好意的に受け止められた。

日本の陸軍参謀本部はアメリカの援助を振り返って3つの特色をあげている。

一、スピードと理にかなった行動

クーリッジ大統領によるトップダウンの政策決定、外交官や陸海軍の指導者たちによる現場指揮が特徴的だった。

特に駐日大使ウッズは各国の大使が大使館を離れて被災地を離れるなか、大使館にとどまり続けて日本とアメリカをつなぐ存在になった。

二、キャンペーンの展開と大量の物資援助

組織的な寄付だけでなく、街頭の募金が活発だった。その結果、諸外国の中でも突出した支援を実現した。

三、誠実で援助の受け手に配慮した活動

恩着せがましいところがなく、日本の体面に配慮して、「真面目にして緊張」ある救護活動をしていた。

例えばアメリカ以外の国では、支援を利用して宣伝活動をしようとしたり、急いで支援に来たものの、帰りの燃料を用意していなかった国があったりした。

好意的な市民の反応



クーリッジ大統領夫妻と日本の遣米答礼使

出典：『Japan's Envoys of Gratitude』Forbes Library, 1930.
<https://archives.forbeslibrary.org/argus/final/Portal/Default.aspx?lang=en-US>

関東大震災における海外からの支援は、当時の新聞でニュースになった。特にアメリカやポーランドには、震災の後すぐに学生らがお礼状を送った記録が残っている。また、50万人の東京市民が記帳したサイン帳（一部を復興記念館が所蔵）がアメリカに贈呈されるなどの出来事もあった。

11月18日には東京市民主催の外交団に対する感謝会が開かれ、12月20日の大阪朝日新聞ではアメリカの援助にたいして答礼使を派遣する案に賛同する記事が掲載された。

そして復興完成式典が開催された1930年には、5人の令嬢たちから構成された遣米答礼使の渡航が実現した。遣米答礼使はアメリカ各地を訪れ、クーリッジ大統領にも挨拶をした。

Seishin Gakuin
Shiba Tokyo.
December 17th 1923.

To the President of the United States

Mr. President

Thank you very much for
your nice and useful gifts to us who
suffered from that terrible earth-
quake. We Japanese are all thanking
your kind heart and are praying for
you every day.

How was America at that time?

I am very glad that you did
not feel our awful shake that
broke so many of our houses.

Tokyo and Yokohama suffered more
than any other part of Japan.

Tokyo was almost all burned by
the horrible fire and all the
people were so terrified.

Luckily I was not in Tokyo at
that time but safe in Shinjuku.

Every time a train arrived at
the station I ran to see the

poor refugees to help them there
were so many of them, that some
of them could not get in the train
so they were carried on the roof
of trains.

Our school Seishin Gakuin, also
broke to pieces, three of the large
brick and stone buildings will

have to be pulled down, but the
Mothers were all saved and the

six hundred children too, and
now we have our classes in a

little Japanese house of our
neighbour who has kindly lent
it to us until we have our own
again but only fifty of us can
fit in. We all learn English and
we like it so much. Reverend
Mother built barracks for the
Japanese classes because all
want to come to school.

This letter shall come to you
for Christmas so I wish you
and your kind people of America

a happy happy Christmas,
and ours also I think through
your kindness will be happy.
With all my love and thank you

I remain

Your grateful little friend

Yoshie Yamaura

山浦芳枝

「100年前の手紙」探しプロジェクト

この手紙は100年前の関東大震災の後、アメリカの支援に対し、日本の学生がクーリッジ大統領に宛てたお礼の手紙です。同様の手紙が約750通アメリカで発見されました。

世界防災フォーラムは今、黎明期の国際災害支援はどんなものだったのかを知るため、東北大学のチームと一緒にこれらの手紙を調べています。ご家族やお知り合いから、このような手紙についてお聞きになったことがある方は、お話しをお伺いしたいのでぜひご連絡ください。

2023年8月、アメリカ・バーモント州に所在するクーリッジ財団の協力を得て調査を行いました。

750通の手紙は3巻に製本されていました。クーリッジ大統領のひ孫にあたる、クリス・ジーターさんがご自宅に100年間大切に保管されていた手紙を見せてくださいました。

貴重な手紙を持ち帰ることはできません。クーリッジ財団の一室でデジタル化作業をしました。私たちはデータだけを持ち帰り、詳細を日本で調査しています。

